



Vol.52

机の上の小さな変革



不足の発見

こんにちは、菅俊一です。今回は、物の置き方を少し変えてみるということをやってみたくと思います。早速ですが、何か自分の身の回りにある日用品を1つ選んで、最も不安定で自立できないような置き方を探ってみてください。そして、その置き方で自立させるために何か別の物を1つ選んで使って構いませんので、どうかその不安定な向きのまま物を自立させてみてください。



たとえば、鉛筆で考えてみましょう。鉛筆の場合、横に倒した状態は当然安定しますし、端が丸くなければ垂直に立てることも可能なため、最も不安定なのは削って尖った側を下にしたときになるはずです。

この鉛筆の尖った側を下にして自立させるためにはいくつかの方法が考えられますが、自立のために「すでに安定して自立している脚を増やす」という方針を採るのであれば、鉛筆に近い高さの文庫本を立ててそれに寄りかからせるような形で鉛筆を立てかけてみるができます。

一方、先端が尖っているのがなぜ不安定かというと、底面が狭く平らではないというところにあるので「不安定な先端を広く面状に拡張させる」方針を採ろうとすると、消しゴムのようなものに鉛筆の先端を突き刺すという方法が考えられます。

このように、不安定な状態の物をどうにか自立させる

ためには、重心バランスを安定させるために底面の数を増やしたり、安定した面を得るために既存の底面を拡張したりなど、現状欠けているところを見極めて適切にその要素を補う必要があります。

実際に考えるときは、手探りで物を組み合わせて試していくことが多いと思うのですが、今回のように自立させるために欠けている部分を言語化し、そこを補うように物を選び組み合わせていこうとすることで、より確実に答えに辿り着けるようになるはずです。

問題解決のためには、試行錯誤のフェーズはもちろん重要ではありますが、時間や予算、人員など様々なリソースが限られるなかで闇雲に探り続けていては、解決に辿り着く前にリソースが足りなくなってしまう可能性があります。

問題の要因を言語化する

今回のように、問題の要因を言語化することができれば、解決のための方向性（仮説）が明確になって、リソースを解決策の探索ではなく検証に多く使うことができます。より解決策を手に入れやすくなります。

実際の社会のなかで発生する問題では、ここまでわかりやすく問題の要因が露見されることは滅多にありませんが、いきなり解こうとせずに問題の性質や要因を丁寧に見ていくことは、問題の大小に関わらず、まず最初に行うべき行動ではないでしょうか。



PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。